

NHK大阪放送局長賞

長生きしてや、じいちゃん

堺市立美原西中学校 一年 猿井 楓菜

私の祖父は、認知症です。七年前にくも膜下出血で倒れ、後遺症で脳血管性認知症になりました。当時祖父は一人暮らしでしたが、医師からは今後介護が必要となり、一人での生活は難しいだろうと診断されたので、母と私が一緒に暮らすことになりました。私はそれまで祖父の膝の上ののったり、二人で出かけたりのするぐらいの『おじいちゃん子』でしたが、それからの祖父はまるで別人で、以前のような関係ではなくなりました。

私の母は祖父の家引越しし、新たな生活をスタートするのに新鮮な気持ちとやる気に満ちていました。これから病気になる祖父をサポートし、ゆっくり明るく二人で暮らしていこうと思っていました。しかし、現実には甘くありませんでした。認知症の祖父は毎日のように、自宅にいるにも関わらず「家に帰るわ。」と言って、玄関ドアを開けて出ていってしまうのです。「ここ、おじいちゃんの家やで。」と、私は何度も言いました。でも、祖父にはその声は届かず、出ていってしまいます。祖父は出ていってしまうと、後ろをふり向くことなくひたすら歩き前進し、自身で自宅に戻ってくることはありませんでした。暑い日寒い日、雨が降っていても歩きます。警察にお世話になる時もありました。なので母は毎回祖父の後ろを追いかけて二、三時間歩き続け、疲れて身動きできなくなったところで連れ戻していました。やっと帰宅しても二時間休憩するとまた「家に帰るわ。」と始まり、一日に何度も徘徊していました。さすがに母は疲れきり、出かけないように祖父の行動を阻止しようとなりました。すると、祖父は逆上し暴力的になり、余計にややこしくなりました。その後介護申請を行い、デイサービスやショートステイなどの介護福祉施設を利用するようになり現在に至っていますが、七年経った今も徘徊はあります。

このような祖父を中心にした生活が続き、私と母はいくつもの葛藤がありました。いつも最後には「おじいちゃん、いつまでも長生きしてほしい。」という気持ちになります。たとえ祖父は認知症で分からないことが多

くても、感情はしっかり持っています。テレビを観て悲しい場面になると、人一倍涙を流します。焼肉などごちそうを食べに行った時には、大喜びでしっかり食べます。私は一緒に屋根の下で暮らしている限り、祖父の気持ちを考えて自分は行動しなければならぬと思うようになりました。

しかし時として、家では祖父の夜の徘徊を止めるためにも、夜は玄関ドアが簡単に開けられないようにしています。ショートステイの施設でもエレベーターに勝手に乗らないよう止めているようです。これは身体拘束になるのかもしれない。鍵の開け方が分からない祖父は、ドア前で何度もドアが開かないとドンドン叩きます。ドアが開かないので、私と母になぜ開かないのかたずねてきます。私たちは怒らず「夜の十時以降は危険なので外へ出られないようにセンサーが働いている。朝七時になれば、センサーが解除されてドアが開くから。」と言って、祖父を納得させています。先日、新聞に『認知症ケアにおける病院の身体拘束、どう減らすか』という記事がありました。身体拘束は、基本的な人権に反した行為になるので禁止されています。しかし、治療が必要であり、危険防止、また他に方法なく一時的な場合のような、やむを得ない時は許されています。なので、二四時間見守り看護できない病院では、拘束しているのが現状です。でも、それはやはり患者にかなりの苦痛を与えることになり。記事の中に、認知症で足腰のおぼつかない女性患者のことが書かれていました。この女性が一人で歩けないよう、ベッドの四方をぐるりと柵（サイドレール）で囲う「四点柵」と呼ばれる身体拘束をしたところ、「私、猿じゃないわ。」と、女性患者が看護師につぶやいたということです。その言葉を聞き、拘束することにより、人が人間らしく過ごせなくなっていると感じました。難しいことですが、拘束せずすむケア方法を考え、改善していかなければなりません。

認知症の人と接することは大変です。その人がたとえ間違えていることをしたとしても決して否定してはいけません。相手の気持ちや人権を尊重した上で接し、意思疎通を図れば、きっと信頼関係は生まれます。

私のおじいちゃんは、「ふうな」と、私の名を白らは呼んでくれません。でも、一つの屋根の下で笑顔あふれています。